

『ミソジニー』

サカモト  
エリ

(舞台上、女が二人立っている。)  
(安来節のドジョウ掬いの風体)

女1 風がびゆるりと頬かすむ、金木犀の香りが胸を指す。たくさんの毎日を頬張りながらえも言えぬ期待近づく、

それに託<sup>かこ</sup>けて膨らむ心。繰り返し繰り返し生きていく。いや、呼吸の繰り返し。消えかける気持ち、傾く

夕 日、いや、心。

女2 夕日を溶かすのは、お目めです。あなたも何度もその夕日の美しさを目に溶かし

たでしょう。黄色、橙、薄紅、ほうかずらのよう、薄紫、青、紺、遠く暗くなっていく。遠く暗くなっていく。映したのでしよう、あなたのその目に、黒い眼に。目を閉じることにはできなかったはず、閉じたその時  
噛みしめたはず。

女1 噛み締めたくちびるは、あなたと重ねた日々があまりにも美しかったから。透明なガラスの中に閉じ込めていた。真空なしあわせ。やわらかいふくらみを重ねる。度溶けてなくなってしまう。溶ける。溶けていく。  
女2 溶ける言葉は耳に消えていく、意識もだんだん遠くなる。だんだんあなたが遠く

なる。だんだん私がわかってくる。あなたとの境界線が確かにあることを。体は、心は一つではないのだ。  
ひとつ、ひとつ  
なのだと思ひ知る。

女1 思い知るたびわかってくる。のべつ幕なし千差万別、森羅万象、一切が起こっているのは頭の中。夢の中も頭の中。脳といふはこの中で映し出される、生み出せられる事象なのだ。実像・偶像すべて頭の中。夢や希望や絶望や、あの子だって頭の中。

女2 頭の中…頭の中…あの子だって頭の中。  
あの子だって頭の中。その子だって頭の中。この子だって頭の中。あの子、その子、この子、この子。

女1 あの子の頭の中。誰かしらいるんだから、

私だって頭の中。あの人の頭の中、私の頭の中。あの人の頭の中、私の頭の中。その人の頭の中、私の頭の中、この人の頭の中、私の頭の中、私の頭の中、どの人の頭の中。いつか隣にいた人は、頭の中から消えていく、わたしを隠して消えていく、頭の中から消えていく。あの人の頭の中、からっぽ。私の頭の中は……。

女2 ……、あの人の頭の中に私がいてくれればいいのに。

女1 ……、誰かの頭の中に私がいてくれればいいのに。

(夕焼け小焼けの歌)

女2 夕焼け小路をとぼとぼと帰る足取り

影につかまる。スーパーの袋持つ人の

反対の手にぶら下がる。夕闇が影を消す。

家の明かりがつく。

女1 今日のご飯はなんですか、

女1 なんでせう、なんでせう。

女2 さあ、手を洗って、うがいをして。

女1 わかりました、わたしも手伝いませうか。

女2 ありがたう、じゃあ、あなたは、それを

切ってください、

女1 はい、合点承知ときたもんだ。

とんとんとん、とんとんとん、

とんとんとん、とんとんとん、

とんとんとん、とんとんとん、

とんとんとん、とんとんとん、

女2 なんの音、

女1 お野菜を切る音、  
女2 ああ、よかった。

女1 とんとんとん、とんとんとん、

女2 なんの音、

女1 お肉を切る音、

女2 ああ、よかった。

女1 とんとんとん、とんとんとん、

女2 なんの音、

女1 ……それはあ、むふふふ。

女2 きゃあ。

女1 絶対離さないぞー。

(にやんにやんじやれあう二人) わいわい？

女2 しどけないぬくもりはらはらと、散らばる気持ちも健やかにの欲望をたんと満たす。薄紅の頬の色合いも  
暗い部屋では見えませぬ。膨らみの間に顔を埋めるこの愛しきよ、ああ、小さな部屋に香る芳しき。ああ  
今は何時でせうか。

女2 ねえ、今何時。

女1 ……。

女2 ねえ、

女1 ……。

女2 ねえってば、

女1 ……、うん、

女2 もう起きてよ。

女1 ……うん、

(女2起きて、作りかけの夕食の準備を  
する。) ※とんとんとんとん、とんとんとん。

女2 ほら、起きて、ごはんできたよ。

女1 ……うん、

女2 ほーら、

女1 ……うん。

女2 こーら、どうしようもないなあ。

女1 ……うん。

女2、女1の携帯が目に入る、女1の様子を気にしながら見る

女2 ……。

女1 うーん、

女1、やっと起きる

女2 ……。

女1 今日のごはんはなんでせう。わあ、オム

ライスだ、わあい。

女2 ……。

女1 ねえ、食べないの、

女2、女1に平手をくらわす

女1、ぶたれた顔を手でなおしセリフ。

女2、遠いポジションにつく。

女1 土砂降りの中、叫んだ声も、なくした嘘も雨音に消えた。小さくなるまで追いかけなかったあなたの背中。小さくなるのが怖かった、見えなくなるのが怖かった。一直線の道をサンダルで追いかけた。

女2 遠く暗い道に雨光が続く、ざあざあが心を乱し、ごうごうが私を支配する。

ああ、私は戻ることはない、ああ、私は何を見ていたのだろう。

絡まる足で街灯をひとつ、またひとつと越えていく。

いつそ雨にふやけてやろうか、いやふやけるだろう、この感覚、何も痛くない、何も感じない、何も聞こえない。

女1 待てよ。

女2 ……、

女1 待ってってば。

女2 ……、

女1 なあってば、

女2 ……、

女1 な、濡れるだろ、なあ。

女2 ……、

女1 おい、

女2 傘も持たずに。

女1 あ。

女2 馬鹿みたい。

女1 うるせえな。

女2 もう、離して、終電間に合わなく

なっちゃう。

女1 いいじゃねえか、

女2 よくない、私たちもう他人なんだから。

女1 ……。

女2 ねえ、離してつてば、

女1 いやだよ。

女2 やめて。

女1 やだ、

女2 いたい、

女1 痛くても離さない。

女2 ねえ、お願いだから。

女1 絶対離さない、

女2 警察呼ぶよ、おまわりさーん、誰かあ、  
助け…。

(女1、女2の手を離す)

女2 ……あああ、離すんだ。

女1 え(？)

女2 あああ、離しちゃうんだ。(女1あっ) 絶対離さない、とか言ったそばから離すんだ。

女1 え、だって、

女2 だってじゃないよ、あんたの、男のそういう所がわたし、嫌いな。

女1 だって

女2 だってじゃないって言ってんじやねーか、こちら警察沙汰なんて一回も巻き込まれたことねーわ。真面目か。

女2 なんでさ、手を離すかなあ。

女1 絶対離さない。

女2 男の絶対とかだいたい嘘。

女1 ……ごめん。

女2 ごめんで済んだら警察はいりません。

女1 むー。

女2 まあいいや、これからは絶対とか、ずっととか、僕だけはとか、君だけは、とかそういうこと容易く遣うのはやめた方がいいよ。

女1 別に容易く遣ってはいないと思うけど。

女2 ふうん、そうやってどんどん嘘つきになっていくのに、真綿で首を絞めるやうに苦しむのに。知らず知らずに罪を背負うことになるのに。

女1 きみは時々僕の知らない人みたいにくわくなる。なんでだろうね。

女2 ふふ、なんでだろうね。

女1 大丈夫、

女2 誰のせいでこうなったと思ってる。

女1 ……。

女2 だが、しかし、手を離してもいい方法が一つだけある。

女1 え、うん、マジか。

女2 マジだよ、知りたい、

女1 はい、知りたいです。

女1、女2の腕を掴む。

女1 もう、離して、終電間に合わなくなっちゃう。



女2 いいじゃねえか、

女1 よくない、私たちもう他人なんだから。

女2 ……。

女1 ねえ、離してっば。

女2 ……。

女1 ねえっば、

女2 ……いやだよ。

女1 え、

女2 ……いやだよ、離したくない。

女1 ねえ、お願いだから離して。

女2 やだよ、

女1 ねえ、やめて。

女2 やだ、

(女1女2の身を引きよせ、ぐっと抱きしめる)

女1 いたい、

女1、2 ……。

女2 こうだよ。

女1 ……やばいね、

女2 やばいでしょ。

女1 えらくやばいです、鼻血がでそうです。

女2 へへへ。

女1 ……でも、

女2 でも

女2 でも、冷静に考えたらそんな夢みたいないな刺激的な甘ったるい女子が好きそうな漫画みたいなドラマみたいな

ことは起きないわけで、夢見る少女じゃいられないわけで。

女1 そら、わからないでしょ。

女2 いや、わかるでしょ。

女1 今までそういう人に、シチュエーションに恵まれなかっただけでしよう。明日になれば、あと、3キロ痩せれば、あと百万円あれば出会えるかもしれない。

女2 でた、不確定要素。

女1 え、だって。

女2 あるよねー、たくさんのもしにも惑わせられて。

女1 ……。

女2 どれも、持っていないのに。

女1 だって…

女2 たくさんのもしも信じていいことあった？

女1 ……あったわよ。

女2 うそつき。

女1 嘘じゃないもん、

女2 じゃあ、なんであなたは今、そんな顔してるわけ、ここにいるわけ、

女1 いいじゃない、別に。わたしだけじゃないんだし。ずっと上の人もいるわ。

女2 他の人なんてどうだっていいの、あなたに聞いているの。

女1 だって。

女2 だって、だって、うるさいな。

女1 だってさ、今までいっぱいあったじゃん。

女2 ……うん、

女1 あったじゃん、

女2 はい、

(女1、女2 揃う動作)

女1 すくつてもすくつても零れていく、

女2 ……、

女1 気が遠くなる作業

女2 ……、

女1 一瞬でも、長い間でもいっしょなのかな、

女2 ……、都合のよい話ね、甘えてる。

女1 え(？)、

女1 え、何、後悔もしているのに、何度も

揃っているのに、後悔したくない。

甘えんじやないわよ、

わたしだって、わたしだってねえ。

(女2の揃う動作が激しく早くなる)

女1 あっ、

(女1の箒の底がぬけている)

女2 笑。

女1 笑。箒代える？

(女1、箒を代えようとする女2、断る)

女2 代えないわよ。

女1 うん。

女2 うん。

女1 また、風がびゆるりと頬をかすむ、

金木犀の香りが胸を刺す。たくさんの

毎日を頬張りながらえも言えぬ期待近づ

く、それに託けて膨らむ心。

女2 繰り返し生きていく、いや呼吸の繰り返し。

女1 消えかける気持ち、

女2 傾く夕日、

女1 夕日を溶かすのはお目め、

女2 いや、心。

おわり。